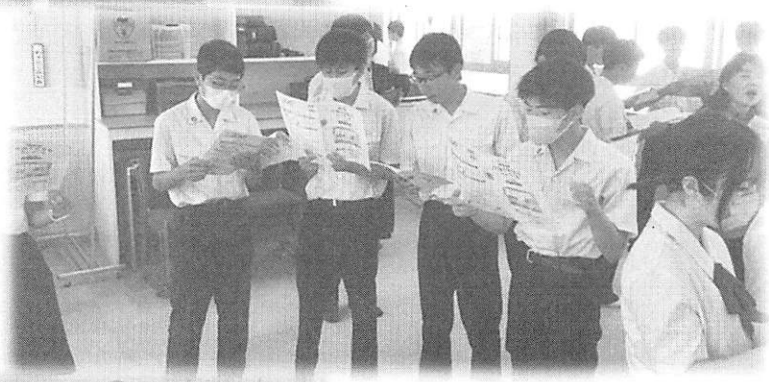
音楽科

教科領域別研究テーマ

【生徒が自ら音と音楽の学びを深める
指導と評価の工夫 -教える授業から学び合う授業へ-】









音楽科

生徒が自ら音と音楽の学びを深める指導と評価の工夫
―教える授業から学び合う授業へ―

実践者　吉村　真一
愛媛大学研究パートナー　楠　俊明、福富　彩子

1　研究テーマ設定の理由

音楽科の学習には、音楽そのものの知識や技能を身に付けることの他に、「心」の力を育む重要な役割があると考える。生徒一人一人が主体的に演奏しながらも、周囲の音を聴きながら合わせて演奏しようとする思いやりや協調性が必要であり、楽曲を演奏するためには繰り返し粘り強く練習する忍耐力や自分の感情をコントロールしながら演奏を最後までやり抜く集中力も必要である。このように、音楽の学びを通して育まれる「非認知能力」は、これからの時代を生き抜くすべての子どもになくてはならない汎用的能力であり、学校音楽教育はその育成のための大きな一翼を担っていると言える。このような学習を通して、子どもたちはまさしくウェルビーイングの実現に向けて豊かな人生を送るために必要な資質・能力を身に付けることができる。

そこで、持続可能な形で音楽科を未来に残していくためには、教師自身が意識改革を行い、生徒主導の学び合う授業づくりへと変革していかなければならないと考えた。これまでの研究の成果を継承しつつ、子どもたちの問いを中心とした授業展開を実施し、「こう感じるのは、このような表現があるからだ」「この表現は、こういう意図があるのではないか」という自分の思いや意図を持ち、音楽を媒体として試行錯誤しながら他者と意見交換・議論させたい。そして、自分と他者の思いや意図に折り合いを付けて、曲にふさわしい音楽表現を創り上げていくような表現活動につなげるためには、音楽との出合いや活動内容、振り返りを工夫すれば生徒の学びが深まると考え、本研究テーマを設定した。

2　研究の内容及び方法

(1)　音や音楽との出合いや学習課題の設定の仕方についての工夫

生徒の問いや気付き、深めたいという思いなどの課題意識を生かし学習活動を工夫することで、生徒が学習の方向性やゴールを意識し、主体的に学ぶことができるようにする。

(2)　音や音楽で交流し、感じ、考える学習活動の工夫

学級への安心感や信頼感を高め、音や音楽及び言葉でコミュニケーションを図る場面を適切に位置付けられるよう指導を工夫し、思いや意図などを相互に伝え合うことで音楽的な見方・考え方を広げ、音楽の意味や価値を自覚できるようにする。

(3)　題材構成と学習の振り返り、評価についての工夫

指導と評価の一体化を図り、題材同士の関わりを明確にすることで、生徒が自身の学びの過程や成果を自覚して、主体的に学習できるようにする。

3　研究の実際

(1)　実践と検証

ア　題材名

混声合唱の豊かな響きを生かし、自分たちの思いを伝えよう（教材「僕らはいきものだから」）

イ　題材目標

○「僕らはいきものだから」の曲想と音楽の構造や歌詞の内容との関わりについて理解す

るとともに、創意工夫を生かし、全体の響きや各声部の声などを聴きながら他者と合わせて歌う技能を身に付けることができる。　「知識及び技能」

○「僕らはいきものだから」のテクスチュアや構成を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考え、ふさわしい歌唱表現を創意工夫することができる。　「思考力、判断力、表現力等」

○「僕らはいきものだから」の歌詞が表す情景や心情及び曲の表現や味わいに関心を持ち、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に歌唱の学習活動に取り組むとともに、混声合唱に親しもうとする。　「学びに向かう力、人間性等」

ウ　題材の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①「僕らはいきものだから」の曲想と音楽の構造や歌詞の内容について理解している。 ②創意工夫を生かし、全体の響きや各声部の声などを聴きながら他者と合わせて歌う技能を身に付けている。	「僕らはいきものだから」のテクスチュアや構成を知覚し、その働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考え、「僕らはいきものだから」にふさわしい歌唱表現としてどのように表すかについて思いや意図を持っている。	「僕らはいきものだから」の歌詞が表す心情及び曲の表情や味わいに関心を持ち、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に歌唱の学習活動に取り組もうとしている。

エ　指導計画（全６時間）

研究の内容及び方法(1)

時間	ねらい・学習活動	重点	評価規準（評価方法）
1	・楽曲との出合いを通して、そこに込められた作詞者・作曲者の思いを知り、音楽の構成を理解する。 研究の内容及び方法(1) 国語科での歌詞の読み取り	知 態	・構成を知覚し、その働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考えている。（発表） ・この曲をどのような気持ちで歌いたいかを仲間と共有し、次時への意欲を高めている。（ワークシート）
2 3	・各パートの音取りを通して、パートの役割や歌詞に込められた気持ちを感じ取る。	思	・意見交換したり、試したりする場面において、楽譜や歌詞を見ながら、表現意図を具体的に考えたり他者の意見を聞いたりし、歌い表そうとしている。（観察）
4 5 6	・全体の響きや各声部の声を聴きながら合唱をすることを通して、自分たちの思いが曲のふさわしい表現につながるよう工夫する。 研究の内容及び方法(2)(3)	思 知 態	・感じ取った曲想や歌詞の内容、構成やテクスチュアなどに触れながら、自分たちが目指す表現についてどのように工夫すればできるか、自分なりの思いや意図を持ち、具体的に他者に伝えたり歌い表そうとしたりしている。（観察） 〈支援〉音楽を形づくっている要素を参考にするよう助言する。 ・創意工夫を生かし、全体の響きや各声部の声、伴奏を聴きながら他者と合わせて歌う技能を身に付けている。（演奏聴取・観察） ・自分が知覚・感受したことや他者の気付きなどを基に、どのように歌うかについて考えたり他者と共に

			歌い試したりしている。（観察） 〈支援〉音程の不安定さを解消するために、範唱を参考にするよう助言する。

オ　授業の実際（４／６時間）

（ア）主題

自分の思いを、曲のふさわしい表現につなげよう

（イ）ねらい

曲想と音楽の構造や歌詞の内容、伴奏との関わりを踏まえて、自分たちが表現したいことを伝えることができる。

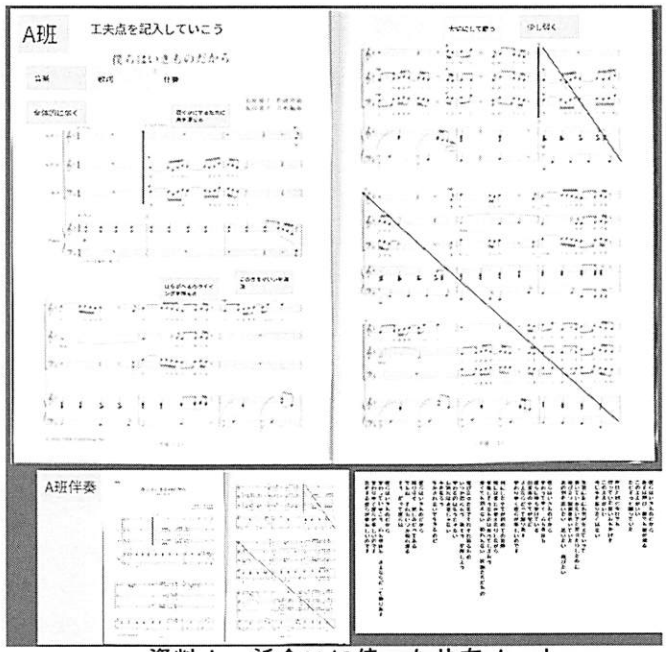
（ウ）展開

学習活動（形態）	時間	○教師の働き掛け ・生徒の反応	○指導の工夫 ◎評価規準（評価方法）
1　ヴォイストレーニングをした。（全体）	5	○ヴォイストレーニングをしましょう。	○声を出しやすくするために、ブレストレーニング→ハーモニー練習を行った。
2「僕らはいきものだから」の１番を歌った。(全体)	2	○１番を歌いましょう。	○前時での学びを振り返るために一度全体で合唱した。
3　本時の目標を確認した。（一斉）	2	○気付いたことはないかな ・正確に音取りできたかな。 ・他のパートと合わせられたかな。	
混声合唱の豊かな響きを生かして、１番をどう歌い上げるか？			
		○１番を四つの部分に分けて、それぞれ担当したところの表現の工夫点を見付けていきます。	
4　本時の学習の流れを確認した。（全体）	2	○どんな音楽の場面なのか、もう一度歌って確認しましょう。 ・正しく音程がとれていない ・楽譜に書かれていることが表現できなかった。	○焦点を絞った練り合いにするために、「歌詞」「強弱」「リズム」「伴奏」など注目するポイントを示した。
5　四つのグループに分かれて表現を工夫した。（グループ） 研究の内容及び方法(2)	25	○どんな風に工夫をしていくか話し合ってみよう。 ・伴奏が～に変化したので、もっとリズミカルな歌い方をしたい。 ・強弱やリズムの変化などから曲の山場が～にある。そこに向けて強弱をつけていきたい。 ・歌詞が～だから、ここをもっと大切に歌いたい。	○生徒の意見を視覚的に理解できるようにするために、ロイロノートに楽譜を提示し、共有ノートを使って意見を集約させた。 ◎曲想と音楽の構造や歌詞の内容、伴奏との関わりを踏まえて、感受したことを表現することができている。（観察） ○表現したい雰囲気となっているかを確認するために、自分たちの演奏を録音しても良いと促した。
6　表現を工夫しながら、自分が担当した部分の１番を歌った。（グループ→全体）	10	○今日の学習を生かして、歌い上げましょう。 研究の内容及び方法(3)	○他の班がどういう工夫をしたかを知るために、共有ノートを活用した。
7　本時の学習を振り返った。	4	○今日の学習の振り返りをしましょう。	○次時の課題につながるように、ロイロノートを用いて、本時の学習活動を振り返らせた。

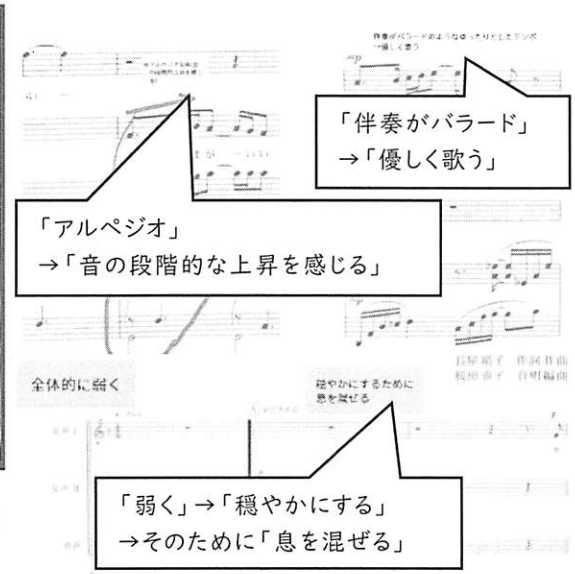
⑵　生徒の学びの実際

ア　音や音楽との出合いや学習課題の設定の仕方についての工夫

本校の３年生は、毎年１学期末から NHK 全国学校音楽コンクールの課題曲に取り組んでいる。そして、松山市連合音楽会では学年合唱をし、卒業記念音楽会では集大成として中学最後の学年合唱をする。したがって、今年も連合音楽会で歌うことをプラスに捉えている生徒が大半ではある。音楽との出合いや「僕らはいきものだから」との出合いを大切にすることによって、半年近く合唱していく曲への想いは変わってくるはずである。まず、本題材の作曲の経緯や作曲者の思いがまとめられた映像を観た。そして、「作者の思いを知り、その思いを知った上で自分に置き換えていく」ことを中心に、「みんなで話し合ってみたい言葉、表現は何だろう？」という学習課題で国語科での読み深める活動を行った。



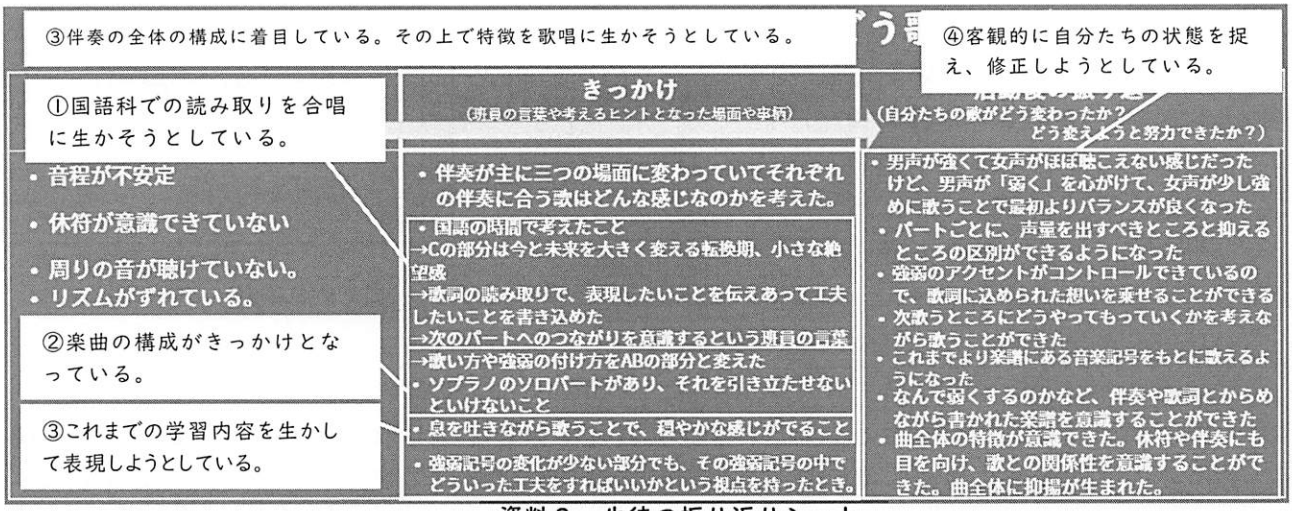
資料１　話合いに使った共有ノート



資料２　楽譜内に記された生徒の意見

イ　音や音楽で交流し、感じ、考える学習活動の工夫

曲を聴いて感じたことを表現していくことや、歌詞の内容を捉えて音楽表現に結び付けていくことに加え、楽譜を読み込み、楽譜に書かれたことを根拠に「自分自身がどう表現したいか」をより具現化し、共有できるように工夫した。そして、ロイロノートの共有ノートで意見を練り合う活動を行った。歌詞全体を捉えられるようにしたことで、生徒自身で練習し、課題を見つけて改善することができた。また、担当する部分以外も見れるように１枚のシートにしたことで、練習番号同士の音楽的なつながりにも意識を向けることができた（資料１）。伴奏の音型や和音の調性を捉えるなど、伴奏の音楽を感じながら歌おうとする記述や、伴奏の曲想を感じたり構成を理解したりして歌おうとする記述（資料２）が見られ、学習活動で大切なことを意識して取り組むことができた。曲を仕上げるために「息を混ぜる」という記述は、１学期に学習した「花（滝廉太郎）」の歌唱のときに学習した内容である。「『おぼろ月』という情景を表現するために『sotto voce』で表現してみよう」と学習した。生徒自身が「強弱がｐであり、穏やかな表現にしたいから、息を混ぜて歌ってみよう」と練り上げた部分である（資料２）。



資料３　生徒の振り返りシート

ウ　題材構成と学習の振り返り、評価についての工夫

活動前と後での変化を見取るだけでなく、「活動後の自分になるきっかけとなったのはどんなことだったのかを考え、知ること」によって生徒自身が自分自身の変容に気付くことがメタ認知を促すために大切なことだと考え、「きっかけ」の項目を振り返りシート（資料３）に設けた。

歌詞の読み込みで深めた「転換期」である部分が音楽的にはどうなっているか、楽譜上はどうなっているか考えるきっかけとなっている（資料３①）。また、自分たちでどういう風に変化をつけるかを考え、試し、練り上げていく活動とつながっている。その他、きっかけとして伴奏の音楽に注目している生徒もいた。伴奏の曲想やリズムに注目し、それを感じ取って歌にしようと考えた生徒もおり（資料２、資料３②）、範唱や自分たちの歌を聴いた印象から音楽を作ろうという姿勢ではなく、楽譜や歌詞、伴奏から根拠や思いを持って音楽を作り上げようとする姿勢が見られた。休符の感じ方、子音の発音についての記述も見られ、系統的に学習を重ねてきた活動を生徒が自ら活用して音楽表現につなげようとしている（資料３③）。

⑶　考察

ア　音や音楽との出合いや学習課題の設定の仕方についての工夫

生徒一人一人が歌詞に対する思いを深め、自分なりの解釈を持つことができた。「転換期」という言葉を何人も挙げており、生徒自身が考え深めることによって、生徒の問いや気付き、深めたいという思いなどの課題意識を生かした学習活動へつながったと考えられる。生徒に「ここをこう表現したい」という学習の方向性や音楽的なゴールを意識させたことで、主体的に学習に取り組むことができたと考える（資料３④）。

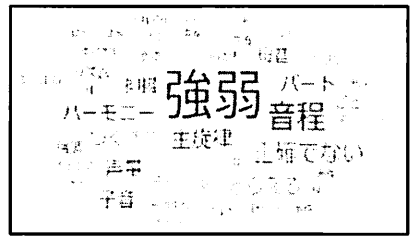
イ　音や音楽で交流し、感じ、考える学習活動の工夫

「歌詞」「音楽」「伴奏」の３項目に分けて書くようにしたことによって、伴奏にも着目できるようになった。また、実際に歌ってみてどう感じたかを伝え合うことによって、聴く人にどう伝えたいかを、音や音楽で仲間と交流し感じながら生徒自身によって練り上げていくことにつながった。楽譜を根拠に、音や音楽でコミュニケーションを図ることができていたと考えられる。また、グループ内で音楽的な見方・考え方を生かした表現を試し、評価し合うことも自分の中での音楽の意味や価値を自覚することにつながった（資料３④）。

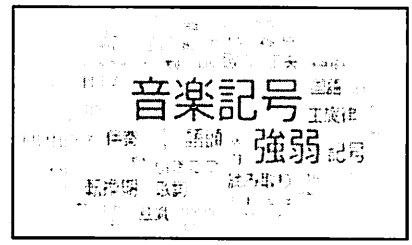
ウ　題材構成と学習の振り返り、評価の計画についてのの工夫

AI テキストマイニングを活用し、生徒の振り返りをまとめた（資料４）。「活動前の課題」には「強弱」「音程」「声量」「ハーモニー」「リズム」などの言葉が目立つ。音取りを終えた

ばかりで、まだ安定しない技能面で不安を感じていると思われ、曲をどう表現するかという部分には至っていない。「きっかけ」では、活動を通して曲をどう表現したいか生徒自身が学習への課題意識を持ったことが分かる。楽譜に着目し、根拠を持って音楽表現につなげようとしている。今回、振り返りの中に「きっかけ」を記述することによって「活動後の振り返り」に対して明確な根拠の記述となった。また、どんな曲想を感じ取って、歌詞のどの部分、構成やテクスチュアに注目して、自分たちが目指す表現に向けてどのように工夫しようとしているのか生徒自身にも明確になった。



「活動前の課題」



「きっかけ」

資料４　課題からまとめの変容

4　成果と課題

(1)　音や音楽との出合いや学習課題の設定の仕方についての工夫

○歌唱教材、鑑賞教材問わず音楽との出合いを大切にすることは、生徒の学習への意欲付けや課題意識を持つことに大きく影響する。今回の「僕らはいきものだから」、３年生で合唱した「群青」、その他鑑賞教材も含めて音楽との出合いを工夫することによって、生徒の取り組み方に変化が出たことは、振り返りの記述内容からもうかがえた。解説や範唱を示すタイミング、生徒の心に訴えかけることができる手立てをこれからも研究していきたい。

(2)　音や音楽で交流し、感じ、考える学習活動の工夫

○生徒たちが目指す豊かな合唱の実現に向けて、歌詞の解釈を行う場面や演奏の聴き合いを行う場面において、他教科の学習など（国語科）を効果的に取り入れた学習活動を展開することができた。国語科との連携により、歌詞の解釈を深めることで、生徒たちは歌に込められた意味や感情を理解し、表現に生かそうとしていた。また、グループで表現の工夫を練り合う活動を通じて、相互の学び合いが促された。

○生徒が学び合う授業を行うために、音楽について他者と意見を交換したり、議論したりする場面を設定し、「このように表現したい」という生徒の思いを基にして題材構成を行うことができた。

●「どのように歌いたいか」を考えるときに、論理的な主張となっていない記述も見られる。国語科での歌詞の読み取りを踏まえて、楽譜を根拠に歌唱表現の練り合いをするには、技能面の指導や工夫と歌詞の読み取りを生かす活動のバランスをとる必要がある。

(3)　題材構成と学習の振り返り、評価の計画についての工夫

○授業を通して生徒自身が成長を自覚することができるように、導入時と終末時で生徒の思考がどのように変化したのか振り返られるように工夫し、変わるきっかけはどこだったかを明らかにする活動を取り入れた。それによって、生徒は音楽を作り上げるときに過程や根拠を大切にするきっかけにすることができた。

●題材同士の関わりを生徒が自覚する機会を設けることができなかった。

参考文献

・三宮真智子(2022)「メタ認知　あなたの頭はもっとよくなる」中央公論新社
・「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料　国立教育政策研究所教育課程研究センター